

## アトモスフィア

## 生化学実験とムダ

遠藤玉夫\*

政権が変わりムダな予算の執行停止がマスコミを賑わせている。また会員の間でも2,700億円という数字が大いに話題になったものである。ここ数年「選択と集中」の掛け声のもとトップダウンで成果の見え易い研究に重点配分されている、と感じられるのは私だけであろうか。もちろん緊急性を要する課題の解決も含め、国が音頭を取り進めている科学技術創造立国として世界をリードしていくためにはトップダウン方式も必要であろう。ただその一方で、短期間で成果の出ない独創性の高い基礎研究を推進し、10年あるいは15年先を見据えた研究課題を押し進めることも重要であることは言うまでもない。昨今の様に世間の景気が悪い時には、どうしても課題の絞り込みが必要となるのはやむを得ない。しかし、成果が見え易いトップダウンばかりではなく、新たな息吹を感じさせる、欧米追従でない日本発の先鋭課題を拾い上げるボトムアップ方式こそ、真の科学立国を目指す我が国のとるべき指針ではないだろうか。むしろ成果が見え易ければ公的資金をつぎ込む必要は薄いとも考えられる。

さて生化学実験とムダの話である。私も若い頃徹夜実験を組み、朝結果を見てムダな実験だった、と何度思ったことであろうか。また、学生同士や助手の先生と話しをして、そんなのやってもムダだ、と言われながら、ムダと思いつつ行なった記憶も多々ある。しかしこれはムダと呼ぶべきものではなく、確かにこういうことはない、ということを実証したと考えるべきではないだろうか。これまで自分は、好奇心を持って好きなことに挑戦し続けてきた。その間には相当ムダな実験も行なって来た。これは単に自分の頭が悪いだけで、実験をやってみなければ分からなかつただけのことかも知れない。確かに論文に実際使用したデータに関する実験だけをやれば最短で結論に達することができたはずである。しかし、出発点から目的地まで地面の上を歩く時、足跡だけの地面があれば歩くことが可能だろうか。おそらく答えは「否」である。「こういうことではない」という結果を自らの手で得ることこそ研究者にとって大変大事なことである。傍から見ると一見ムダに見えるかもしれないが、若い皆さんには勇気をもってムダな実験を行なってほしい（指導教官にとっては金銭的に大変辛いだろうが）。

次に努力して得た研究成果の発表となる。発表する手段は学会と学術誌である。学会は会員の研究をサポートするものとして位置付けられる。年会や支部会での研究成果を発表する機会、これは大切な会員の権利であろう。さて、その機会であるが、数年前に実施した会員に対するアンケートでは、生化学会と分子生物学会との合同年会開催の希望が90%以上と圧倒的であった。これまで単独開催の場合は、2か月余りの間にそれぞれ開催され、発表内容も生化学と分子生物学の研究内容はかなり似たものになっている。それを敢えて線引きをして、近い時期にそれぞれマンモス大会を開催することは双方の学会にとって、即ち双方の会員にとってどれだけメリットがあるのか甚だ疑問である。会員も自分の専門領域に関しては、それぞれ専門性の高い学会や研究会で発表し議論を重ねており、生化学大会や分子生物学会大会では自分の専門性に加えて周辺領域の最新情報を得るために参加している諸氏も多いと思う。前回のアンケート以降会員の意見が大きく変わったとは考えられない。さらに今後若年世代の人口は減少することは明らかであり、生命科学の真の発展のために是非両学会は大所高所から判断してほしい。

日本は今、欧米先進国との熾烈な競争のみならず、中国、韓国、インドなど新興国の猛烈な追い上げにあっている。科学も例外ではない。近視眼的な成果主義に陥ることなく、鳥瞰的に研究の土台を築いていくことが砂上の楼閣ではない真の科学技術創造立国を目指すために大事であることを強調してこの文を終わりたい。

\*東京都健康長寿医療センター研究所，研究部長